

BOOK Review

専門医が教える

研修医のための診療基本手技

評者 青木 眞 感染症コンサルタント



編者のお一人である大村和弘先生とは、当時大村先生がご所属だった総合病院国保旭中央病院にカンファレンスなどで評者が定期的に伺っていたことでお会いして以来14年の付き合いとなる。初期研修の後、NPO法人JAPAN HEARTで吉岡秀人先生と出会い、アジアを中心とした国際医療協力に一時期身を投じたことは、明るく奔放なようでいて繊細な神経を持つ彼を知るものとして好ましく、ずっと好感を抱き続けてきた。プライマリケア、総合診療といった世界から一見最も距離のある、巨大な機械力に取り囲まれた大学病院という環境に身を置きながら、臨床医として誰もが身につけておきたい「一定水準の診察、基本検査、救急を含めた手技の習得」をめざした本書を生み出した大村先生ならではの歴史である。本書の、特に大村先生自身が執筆された章には、大学病院で週6日の診療を受け持ちながら、年に一度は自費でアジアの国を訪ね、国際協力活動に取り組む一人の医師としての、単なる知識や技術を越えた優しさや矜持が溢れている。

一部を紹介すると、

I-6「小児の診察のしかた (p32)」

基本的に小児の診察(耳鼻科領域)は抑えずに行えますし(中略)この診察の根底に流れる原則というのは、子どもの自主性、自律性を重んじて、診察を理解してもらうことです。(中略)扉から一番離れた場所(机がある位置よりもさらに遠方)に椅子を置き、(中略)これは、子どもが嫌だと思ったときに逃げることができる

場所で、私のことをまず認識してもらうということを大切にしています。

この章の「挨拶」「スキンシップ」「約束」などの説明や写真が大村先生の診療姿勢を示しており好ましい。

II-2「頭頸部：口腔内 (p49)」

反射を起こさないで診察をするということ(評者はわざと反射を起こして喉の奥を見ていました)(中略)では、どうすれば反射を起こさないのか？ (1)患者との呼吸を合わせる、(2)舌圧子の使いかた、および診察の順番、(3)最初は優しく、刺激を少なく、(4)評価するポイントをしっかりと決める(中略)実はほとんどの患者で舌圧子は必要ありません。

この他にも、III-1「血液型判定・交差適合試験 (p132～135)」(順大練馬病院・小松孝行先生)、IV-1「末梢静脈路の確保 (p156～163)」(慈恵医大血管外科・宿澤孝太先生)、IV-4「グラム染色 (p178～181)」(東京ベイ・浦安市川医療センター感染症内科・織田鎌太郎先生、関東労災病院感染症内科・本郷偉元先生)などをはじめとするわかりやすいセクションが多い。

通読するのは骨が折れると思われる方は、その都度今日行わなければならない手技の予習として関係のセクションを勉強するのもよいと思う。「技を持っている専門家が集まり、研修医が必要とする身体診察法や手技を、書き合う教科書を作りたい!!」という意図をもって作られた本書が、多くの研修医や彼らの指導医の眼に留まることを期待している。

大村 和弘, 川村 哲也, 武田 聡 編

B5判/304頁/2018年/定価(本体5,000円+税)/ISBN978-4-260-03026-7/医学書院刊